



子育て情報 10月号

平成28年 10月
椋山女学園大学附属幼稚園

大きくなるということ

園長 横尾 尚子

運動会からアートギャラリーへと深まる秋は、お子さんの成長ぶりを親子で喜び合える素敵な季節ですね。私達大人は子どもの頑張りに「大きくなったなあ」と目を細め、子どもは「上手でしょう」「大きくなったでしょう」と胸を張る。この素敵な季節に、「大きくなること」について考えます。

「大きくなること」は「発達」という言葉で言い換えることができますでしょう。「発達」とは、「受胎から死に至るまでの人の心身の形態や機能の変化の過程」のことですから、「大きくなること」つまり子どもが大人になっていく過程だけを意味する言葉ではありませんが、その主要な過程として位置づいています。「発達」は、「子どもの権利条約」の4本柱(「生存」「保護」「発達」「参加」)の一つであり、「育つ権利」として、「子どもたちは、教育を受ける権利を持っている。また、休んだり遊んだりすること、様々な情報を得、自分の考えや信じる事が守られることも、自分らしく成長するためにとっても重要である」ことが明記されています。私達大人には、子どもの育つ権利(発達)を守る義務があります。

「発達：development」の語源は「包みを開く」だそうです。もって生まれた特性(その人を特徴づける性質や能力)が、包みが開かれるかのように表に出てくることを意味しています。ここで、「もって生まれた」を強調するのが「遺伝説」。ゲゼルの双生児研究やゴールトンの家系研究が、「やっぱり遺伝だよ、血だよ」と主張します。その対極で、「包みを開かせるもの」の重要性を強調するのが「環境説」。代表的な研究者ワトソンは、「健康な子どもと育てるのに適切な環境さえあれば、どんな専門家にでも育ててみせよう」と豪語したと言われています。今日では、「遺伝か環境か」ではなくて、「遺伝も環境も必要」と考えられています。

「遺伝も環境も必要」とする考え方には諸説ありますが、ジェンセンの環境閾値説(かんきょういきちせつ)では、「特性によって環境要因から受ける影響の大きさが異なり、一定の水準(閾値)に達した時にその特性が発現する」とされています。身長や母国語の発話のように、比較的貧しい環境でも発現する(表に出てくる)特性もあれば、絶対音感や外国語の音韻のように、非常に豊かな環境(もしくは訓練)がないと発現しない特性もあるそうです。多くの特性はその間に位置していて、発現にはそれぞれに適切な環境水準が必要であるとされています。環境の中でも、人は重要な環境要因です。「大きくなる」時期の子どもにとって、大人は非常に重要な環境要因です。子どもの良きモデルや指針となれるような、人として高い水準でありたいと思います。

ちょっと堅い話になってしまいました。この続きは次回に、とさせていただきます、最近の出来事から。

9月の最終日曜日の夜、デンパーク(安城市)の「中秋のあかり祭り」に出かけました。ライトアップされた公園内は、日中とは別世界。公園内にちりばめられた3,000本の竹あかりと市内保育園等による2,000個以上のペットボトルキャンドル。ローソクを積み上げたキャンドルピラミッドに、あかりがもれる竹のオブジェ。ゆらゆら揺れるあかり達は何とも幻想的で神秘的でした。

やがて始まる和太鼓パフォーマンスを待ちながら、その野外ステージに背を向けて、そばのキャンドルピラミッドを心地よく眺めていた、その時です。ピラミッドを取り巻く色とりどりの太ローソクのあかりが一つ、ふっと消えました。ローソクが短くなっていたのかな、と思っていると、あちらで一つ。そして、また一つ。よく見ると、2歳ぐらいの男の子が吹き消しているのです。男の子はその度に、母親の方を振り返るのですが、母親は野外ステージの方を向いて座ったまま。カメラを構えた先のローソクを消されてしまった男性は、困惑気な顔をしたものの黙ったまま。「あっ、ローソク消してる」と近くの子が自分の母親に教えても、彼女も黙ったまま。男の子はうろうろ消し続けて、とうとう私のそばへ。私は思い余って、「消しちゃダメよ」とささやきました。男の子は一目散に母親の元へ。母親は膝の上でぐずる男の子の頭をなでながら、「かわいそうにねえ」とこちらへ顔を向けました。また余計なことを言ってしまったようです。自分の子どもを叱るのも難しいですが、他人の子どもを叱るのはもっと難しいですね。

優しく声をかけたつもりでしたが、見ず知らずのおばさんに突然叱られて、やはり「かわいそう」だったかもしれません。でも、悪いことをしているのに自分の親に叱ってもらえなくて、「かわいそう」でした。何度も母親を振り返っていた男の子には、ローソクを消すことが悪いことだと薄々わかっていたのかもしれませんが。母親に「自分を見ほしい」「手と心を離さないでほしい」と伝えたかったのかもしれません。